

次号予告

特集 理学療法士・作業療法士とバイオメカニズム

バイオメカニズム研究の動向とその臨床的応用

(総論)(各種の流れの紹介).....都補装具研究所 加倉井 周一

「人工の手」研究のあゆみ.....東大・工学部 舟久保 熙 泰

義足の工学的研究のあゆみ.....労災義肢センター 土 屋 和 夫

福祉工学のあゆみ.....東大・工学部 渡 辺 茂

座談会/PT・OTとバイオメカニズム 都補装具研究所 司会 加倉井 周一

と び ら.....日本医科大学 石 田 肇

講 座 運動学シリーズVII

姿勢と体幹・頸の運動学(3).....都立養育院病院 柳 沢 健

メディカル 障害者心理(6).....国立身体障害者センター 永 井 昌 夫

プログレス リハビリテーション機器(6).....都補装具研究所 加倉井 周一

Q and A 「PT の 10 年後の展望について...」.....A 奈良 勲・Q 伊藤直栄

本の紹介 古賀唯夫・原 武郎著

「自助具」(機能障害と道具の世界).....都養育院病院 三 浦 頼 子

新井清三郎著 「目でみる発達診断」.....都心障センター 江 口 洋 子

〈第2回「理学療法と作業療法」賞・入賞論文〉

重度 CP 児の下肢での

ADL 訓練の経験.....青森県立あすなろ学園 斎藤康弘・他

進行性筋ジストロフィー症の ADL 推移

(F.S.H. Type と L-G.

Type について).....名古屋市立大学病院 野々垣嘉男・他

編集後記

読書の候、11月号をお届けします。片麻痺はこの雑誌で定期的にとりあげているが、今回はADLを中心として、その予後と決定因子について執筆していただいた。

武富氏には片麻痺に合併する疼痛について広く取り上げていただき、そのアプローチについてPTの立場から書いていただいた。

石川氏には、退院後在宅片麻痺患者のADLの予後と決定因子というまことにとらえにくいテーマであったが、その期待に応えていただくことになった。特にプルンストローム・ステージとADLとの関連についての考察は今後の研究課題として追求してゆかねばならないものであろう。また、米田氏らの論文は、実際の症例の実体を細部まで調査し、明確に表示していることに感心させられた。次に歩行機能の予後と決定因子について伊藤氏が調査結果を発

表しているが、退院後の歩行機能が更に向上したというデータは興味深いものがある。斎藤氏には上肢機能の予後と決定因子について述べていただいた。片麻痺における手の予後については皆、頭を悩ます問題であるが、氏は手一道具一目的体の相互の関係の成立までを評価すべきであるとしているが、示唆に富むものである。

運動学シリーズも姿勢・体幹・頸の2回目に入り、仲々頑張っているようである。

最後にセラピスト諸氏にお願いであるが学会での発表をそのままでおしまいにせず、更に肉づけをして、「研究と報告」欄にどしどし投稿していただきたい。そのことによって実績も残るし、研究内容も発展的に積み重ねることができる。

この雑誌はオリジナリティーの富んだ研究発表を少しでも多く載せることによって日本のセラピストの向上に寄与することが大きな目的でもある。奮って応募していただくことを願って筆をおきます。(松村秩)

＜編集顧問＞

天 児 民 和
九州労災病院長

五 味 重 春
筑波大学心身障害学系教授

砂 原 茂 一
国立療養所東京病院長

津 山 直 一
東京大学教授・整形外科

水 野 祥太郎
川崎医科大学学長
(五十音順、以下同じ)

＜編集委員＞

上 田 敏
東大リハビリ部

荻 島 秀 男
都養育院リハビリ部

佐 藤 肇
神奈川リハセンター

鈴 木 明 子
府中リハビリ学院

谷 岡 淳
自治医科大学

寺 山 久美子
都心障センター

福 屋 靖 子

松 村 秩
都養育院リハビリ部

＜編集同人＞

明 石 謙

大 井 淑 雄

大 川 嗣 雄

大 橋 博

鎌 倉 矩 子

紀 伊 克 昌

小 林 夏 子

駒 沢 治 夫

佐 藤 剛

田 原 澄 彦

富 岡 詔 子

奈 良 勲

藤 沢 しげ子

藤 本 欽 也

前 田 守

松 本 妙 子

矢 谷 令 子

山 下 隆 昭

横 山 敏

和 才 嘉 昭
(担当 細田・西塚)